

令和2年度第1回東海村（仮称）歴史と未来の交流館展示監修委員会 会議録

1. 日時	令和2年8月25日（火）13:30～15:00
2. 場所	東海村役場 議会棟201・202委員会室
3. 出席者	高橋修委員長，塩谷修副委員長，菊池芳文委員，瓦吹堅委員，宮内教男委員，高橋裕文委員，萩谷信輝委員，林圭史委員，小野寺淳委員，宮田裕紀枝委員，益子美由希委員，佐々木啓委員
4. 欠席者	安嶋隆委員
5. 議題	(1) 展示室1の展示制作物について (2) 展示室2の展示制作物について (3) 今後の進め方について

主な発言内容

【●：展示監修委員 ○：事務局】

(1) 展示室1の展示制作物について

- 委員会の中で議論するのはこの工程表でいうと，展示室1のほうでは，まる博地図と壁面イラストについてということか。
- そうである。他にもお出しした資料の中で何かご意見があれば，それを反映した形で進めていくようなイメージ。
- 展示室1の擬木で，松というアカマツとクロマツは意識しているのか。
- クロマツをイメージして作っている。海岸の砂防林を表現しているため。
- 図面番号14のまる博テーブルのコンタ模型の色分けだが，小野寺委員に専門的な立場から適当なカラーリングをご教授いただきたい。
- 等高線のカラーリングは，低いところは寒色で，高いところは暖色なので，これで基本的にはいいと思う。ただ，赤の主張が少し強すぎると感じる。同じ暖色系の中で赤の色合いを変えてみたらいいのではないかと思う。
- アカマツは茨城県では実は非常に重要。近代の茨城県では，大量の薪が東京へ供給されている。アカマツとクロマツの両方があった方が，学習上もいいと思う。
- アナログでとてもいいと思うが，これから ICT 教育を考えざるを得ない中で，こういった内容をデジタル化して，子ども達が勉強しに来たときに，アナログ的なものを触ると同時に，デジタル上でやるようなことも恐らく必要になってくるのではないかと思う。もし検討の余地があれば，検討していただければと思う。
- 松の問題が懸案事項で出ているが，クロマツに限定したのは砂防林をイメージしたからである。
- 展示室1の『水辺のムラ「東海村」の風土』の部分だが，広葉樹という言葉の表現は検討すべきだと思う。
- 擬木は木1本を表現しているのではなく，その環境を象徴するものとして擬木を置くというようなイメージ。久慈川のところは河畔林，海岸のところは砂防林，台地上のところは里山的な雑木林をイメージしている形。竹と松は樹種が選定されるので分かりやすいが，雑木林については木という形で表現して，例えば春であれば山桜になり，夏にはクヌギになるというように，変化していくという要素を持たせようと，大枠で広葉樹という表現になってしまっている。
- 季節で変化していくということか。

○そうである。そのため樹形も図面番号18のように、一般的な木になっている。

●広葉樹の中でも落葉樹と照葉樹があるので、そのあたりをはっきりと言わないので広葉樹と表現したということか。

○広葉樹という表現については再度考えたい。

●海岸はクロマツというのは分かる。しかし笠松運動公園あたりになるとアカマツになる。そのことも子ども達を感じる表現であるといい。内陸部はほとんどアカマツ。環境によって自生しているものが違うということも勉強できるようになるといいと感じた。

●図面番号16の絨毯の色分けだが、細かくしてもいいと思うが、図面番号1にはベンチが5つしかない。絨毯の数だけベンチを作るのか、それとも例えば海のベンチなら2種類で色分けするのか、ここはどうするのか。

○検討する。

●まる博テーブルが半分に分かれている。使い方を教えて欲しい。

○半分に割れるが、基本的には円形で使う。テーブルにはマグネットが貼り付けられる仕様になっているため、テーマを決めてその地点にポイントを立てていくという展示も考えられる。また、現在の地図に昔の地図を重ねると自分の住んでいるところの昔の姿も分かる。様々な使い方が可能。

●動かすのは学芸員か。そのときの展示のコンセプトに合わせて用意しておくということか。

○そうである。

●植生のところに戻るが、広葉樹という言葉の誤解をなくすための提案がある。アカマツをクヌギ・コナラに加えるのであれば、他のところでは雑木林と書いている。図面番号15の壁面に貼るマグネットに、アカマツやクヌギなどを作れば、子ども達はその景色を見ながらマグネットを貼っていく。そうすれば比較的誤解が少ないのではないかと思う。基本的にアカマツは人工林である。時間的な経過のものと自然のものを一緒にしているので難しくなる。それを区別する工夫が必要に感じる。

(2) 展示室2の展示制作物について

○展示室2の「村人の物語」の部分の展示ケースに変更あり。

●以前の展示ケースはどうなっていたのか。

○以前は幅2mの展示ケース2つだったのを、今回幅1.5mの展示ケース2つにした。元々可動はできるものだったが、隙間がない仕様だった。

●運営する側が使いやすいものでいいと思う。

(3) 今後の進め方について

●図面番号28のコーナーサインの時代区分は何が基準なのか。また、年表の時代区分だが、太古とは何を指しているのか。

○東海村がまだ海の底だった時代を指している。

●そこから平安時代までというのは違和感を感じる。また、昭和・平成・令和と分けているが、こんなに分ける必要はあるのか。近代・現代くらいでいいのではないか。

●近代部分を厚めにしたのは、東海村の事柄をたくさん入れたいから、あえてそうしたのではないか。

○その通りである。情報の多い・少ないが年代でバラつきがあるため、平均的にならずとこのような切り方になった。今後精査していくが、基本的には情報量が多いところはパネルの占める割合が大きくなっていく。時代で区切っているわけではない。また、図面番号28のコーナー

サインだが、通史展示でなくテーマ展という形にしているため、展示しているものの時代の表示となっている。生活となっている部分はトピックス展であり、今後テーマごとによって変わっていく。そのため、生活という大枠の言葉とした。

- この年表は本の巻末に載るようなものだと思う。どれだけの人がこれを見るのかということを見ると、もう少し見やすい形のパネルにできたらいいと思う。
- 私も同感である。もう少し情動的に抑えてでも、見てもらえるような年表を作った方がいいだろう。大まかな時代の流れの中で、東海村のポイントになるようなところを確認していくような方がいいと思う。単純な年表は見てもらえない気がする。余白があるような時代はもう少し写真・イラストを入れられるだろうし、そういう意味での工夫はあってもいいと思う。
- 学問上の厳密さと、興味を持って展示を見てもらう工夫は個々に検討してもらえればと思う。
- 展示室2の各コーナーの文章だが、文章をかなり短文化しないと読まないと思う。キャッチフレーズ的に文章を書いた方がいいと思う。字数で人が見ないとならないように。解説文はほとんど読まれない。
- 図面番号28の解説パネルについて説明が欲しい。
- 展示室2は6つの物語という形にしたが、その物語のプロローグとして最初の部分にコーナー解説パネルがくる。一方の下部の解説パネルは、各物語が架空の人物を通して展示物を紹介していくという構成になっているが、あくまでも設定であるということ、事実とそれに基づいてこの展示を作っているということを紹介するのが大項目のエリア図になっている。次の章立てでストーリーを書き、解説パネルでは別に解説すべきことを作っているという形になる。
- 図からそれが伝わりにくいものになってしまっていると思う。
- 例えば「砂と塩の物語」だが、村松白根遺跡を念頭に置いていると思うが、時代的な幅があるので、解説文の中で時代を明記してしまうと出土品の時代と合っていないということが起きると思う。解説の文章を工夫しないといけない。
- 確かにストーリーで明確に時代をうたってしまうと、展示物で時代が違うものを出したときに誤解を生じる可能性がある。そこは注意していきたい。
- 幅を持たせた文章を書くことも必要。展示物を変えることもある。そういう文章を上手く作り出すのが大事。
- 通史展示を最初イメージしていたのでなく、トピックス的に時代を象徴する東海村にふさわしいものを取り上げていくというところから始まっている。それを大体時代順に置いていくというところからみんな繋がってくる、それで時代区分が問題になってくる。1つの時代を設定してそこに物が入るが、年代がずれてしまうということに結果的になってしまった。そこは見る人に誤解のないように上手な説明と整理をお願いしたい。
- 年表の部分で自分の担当する部分が広くなりそうだと感じている。改めて確認したいが、この年表の「昭和」「平成」「令和」などは、年表の1番上に来るという理解で大丈夫か。
- そうである。
- となると昭和だけでかなりあるという形になるが、その点については修正とかはこっちで何か考えた方がいいのか。
- 今は仮で区分を分けているが、1パネルに入るギリギリの量というところで区切っている。そのため平成や昭和が中途半端に区切れている。そのため、委員の皆様の意見を聞いて、区切りについてはもう1度やり直そうと思っている。そのため内容の方を見ていただきたい。
- 委員会の中で少なくするという意見もあったが、少なくするという方向で考えた方がいいのか、それとも減らさないで内容を吟味すればいいのか、どちらなのか。
- その部分は悩んでいる。通史展示ではないため、どこかに東海村の歴史の流れを書く必要がある

ると一方では思うところがある。ただ、昭和以降の歴史については量を減らす方向で考えたい。

- これは意見だが、年表は展示内容とリンクさせたものにした方がいいと思う。展示で出ているものについては字を太くするとか、分かりやすく示すような形で出すと見ている人が非常につかみやすくなると思う。
- 展示室1の製作物の議論の中で悩んでいることなのだが、3つの擬木の下地が真っ白である。春は山桜、秋はドングリという、白い土台の上にカラーのものを貼るということで今調整しているが、土台が白で違和感が出ないかどうか、ご意見を伺いたい。
- 擬木を白にした理由は、様々なものが貼られていくが、それが際立つような形にしたらいだろうというところ、あとは色味がある展示室のエリアのため、白がよいのではないかという展示業者からの提案があったためである。
- かえって違和感があるかもしれない。
- それを益子委員も危惧していた。1番難しかったのは雑木林のところ。そこだけは四季で変化があるので、色を付けると難しくなる。そうすると全部白にして、葉っぱを際立たせた方が見た目として綺麗ではないかという提案があった。
- 色々試してみた。建物の全体の色がたくさん入ってくる中で、建築の方と相談し、展示の方は色んな色があるということで、歴史BOXも含め総合的に白でナチュラルに仕上げたいと考えた。
- この点はまたご検討いただけたらと思う。
- 今日は色々な意見が出た。まだまだ全体で検討すべきことがあると思う。こういう機会をできるだけ設けて欲しい。色んな意見を聞きながらやるのが大切だと思う。参加する先生方、忙しい中だと思うが、こういう時間を取っていただけるとありがたい。